

呉錦堂を語る会通信

NO.33 May 2017

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘 雄三 方「呉錦堂を語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「呉錦堂を語る会通信」編集委員

発行日 2017.5.15



『続刻杜白両湖全書』に見る呉錦堂の故郷慈谿での水利事業

本第33号でとりあげました『続刻杜白両湖全書』（孫文記念館所蔵）は、呉錦堂の事蹟を語るとき、社会事業関係では、『通信』第29号でとりあげました「神出村役場文書」と並び、特に貴重な資料といえます。

ここでは、森田明著『清代の水利と地域社会』（2002年 中国書店）「第九章 呉錦堂と杜湖・白洋湖の水利事業」を手引きとし、『続刻杜白両湖全書』に当たりながら、先ず、呉錦堂が行った杜湖、及び白洋湖の水利事業を概観し、続けて、「水利局經理沈衍周の不正事件」に触れます。（編集委員 橘 雄三）

《1. 『続刻杜白両湖全書』について》

『続刻杜白両湖全書』は、呉錦堂が郷里、浙江省寧波府慈谿県北部の杜湖、及び白洋湖で行った水利事業の記録を中心とし、水利の管理運営、更には、錦堂学校の創設などについても記述されています。

『続刻杜白両湖全書』は、縦36cm、横25cmの大判で、凡例2頁、序文8頁、本文147頁からなっています。奥付がないので、発行年月、発行人、発行場



所等は不明ですが、森田明氏は上掲著で、「最新の記事が民国六年七月八日となっているので、早くとも民国六年（1917年）後半頃の発行と考えられます」と記されています。

編者については、『続刻杜白両湖全書』の冒頭、凡例一頁の記述から、

杭州の葉浩吾が原編し、鄞県の楊枕谿が続編してなったものであることがわかります。

《2. 『続刻杜白両湖全書』の書名について》

ところで、書名ですが、表紙は、上の画像のように、『続刻杜白両湖全書』となっており、「續」を新字体「続」に改めた『続刻杜白両湖全書』が通称です。しかし、『続刻杜白両湖全書』文章中には、「續刻杜白二湖全書」、並びに「續刊杜白二湖四浦水利全案」の記述があることを併記しておきます。

なお、「續刻」の由来ですが、これについては、

『続刻杜白両湖全書』凡例二頁に、次の記述があります（→）。

「郷里の先賢王名揚が、清の嘉慶年間、当時すでに刊行されていた『杜白二湖全書』を重刊したことが知られていたため、呉錦堂は、自らの水利全案を「續刻杜白二湖全書」と名付け出版した。そうすることによって、前人の榮譽を尊重し、併せて、先の事業の初志を敬い受け継ぐ意を示した」

凡例
一 本書係記載吳公錦堂續修慈谿北郷杜
白二湖水利工事而作按慈邑先賢王公名
揚於前清嘉慶時曾重刊杜白二湖全書故
吳公命本書之名曰續刻杜白二湖全書所
以示不敢專美前人之意並表仰紹先緒之
初衷也

『続刻杜白両湖全書』
凡例二頁

《3. 森田明著『清代の水利と地域社会』からの引用》

森田明著『清代の水利と地域社会』「第九章 呉錦堂と杜湖・白洋湖の水利事業」は、「はじめに」、「一 呉錦堂の経済活動」、「二 『続刻杜白両湖全書』の刊行」、「三 杜白両湖の水利事業」、「四 杜白両湖の管理規定」の5つの節から成っています。

以下、「三 杜白両湖の水利事業」からの引用です。なお、この節の注記には、典拠文献として、『続刻杜白両湖全書』とともに、『慈谿県志』の名が頻出します。

浙江省寧波府に属する慈谿県北郷は、一郷（鳴鶴郷）五都（二十六都より三十都）より成っており、僻処海隅にあつて面積百余里、人口数十万、郷田は計約十萬六千畝であつた。

しかし、その地形は山を負って海に面し、そのうえ西において接壤している余姚の土地が高

『続刻杜白両湖全書』に見る吳錦堂の故郷慈谿での水利事業（続き）

く、慈谿が低いため「雨少則旱、雨多則成災」と、常に旱潦のいずれかに悩まされる状況であった。杜湖・白洋湖はかかる災害に対処するため、漢末に古人の捐田によって設けられた水源調節湖であったという。（中略）歴朝の興修が隄・塘等に加えられ、両湖の「春畜夏洩」の機能が円滑に維持されてきた。そのため、「旱澇無慮、郷稱殷庶」といわれて両湖の利益は顕著であり、「二天」として地域の人々から尊重された。

しかし、天災による水利施設の崩壊、近湖奸民の侵佔湖田化などによる両湖灌漑機能の不全などが頻繁に生じた。その根絶は不可能であったが、清嘉慶年間の葉公坦、王名揚のように、塘閘修築、湖口復湖に巨資を捐助する先人もあった。吳錦堂はこれら先人の志を継ぐ人であった。

再び引用します。

光緒三十二年、ちょうど祖国に墓参のため帰郷したのが吳錦堂であった。彼が故郷で遭遇したのは、長雨のため数百頃に及ぶ綿花田、稲田の淹没状況であった。当地の諸父老に詢ねたところ、浦塘の塞坍によって被害を受けた民田は十余萬畝、花地四十余萬畝に上っており、被害額は百五、六十万円に上ったという。

続けて引用します。

こうした状況を見聞した吳錦堂は、光緒三十二年から宣統二年に至る四年間に総額銀七万四千七百七十六元を寄捐し、大規模な水利事業を推進した。それらの主要なものを挙げれば、杜湖外塘一条、中門閘一座、減水壩二座、杜湖裏閘一座の修築、減水壩二座の新鑿、漾塘一族の新築、塘閘・石壩各一座の修理、涼亭二座の新築、石橋十二座の建造、濬河二道、杜白二湖墾田五十二畝、漾塘基田三十余畝の購買のほか、山麓の開鑿による水勢の疎通、道路の開治等であった。

吳錦堂の水利事業の概要を『続刻杜白両湖全書』の記述と画像からその一部を転載いたします。



橋の文字は右から読むと
吳錦堂建 三閘橋 建堂錦吳

書全湖二白杜刻續

一 修杜湖蓮池巷前路工料等	計洋壹百元
一 籌辦水利工役食糧等費	計洋壹千九百柒拾元零五角
一 買回杜白二湖田五十二畝零	計洋壹千壹百零六元貳角貳分九釐
一 酬沈衍周 辦理湖田收租事 宣統二年	計洋肆千元
一 酬葉秋生 料理湖田事 夫馬費	計洋參百元
一 酬委員 夫馬費及督工 先後十五人	計洋壹千貳百五十元
一 調處湖田訟事 各費等	計洋貳百七十五元
一 測量湖浦機器二副及各器具	計洋壹千壹百五十元
一 各工匠用 木柴水脚及開板石等費	計洋貳千七百五十九元五角
一 湖田查姚糧食用等費	計洋參拾壹元九角七分
一 繪杜白二湖 湖田圖及湖田報告	計洋壹千五百三十元
一 移造漾塘涼亭等並修補塘壩各費	計洋五百元 用洋一千二百肆拾元
一 買回湖田過戶費	計洋拾七元
總共計洋七萬壹千捌百貳拾六元壹角六分九釐	
收回水利局貼修湖塘費洋壹千參百五十元	
除收過共計吳作鏞捐助洋七萬四百七拾六元壹角六分九釐	
加民國元年移造漾塘涼亭等費 吳錦堂捐助五百元 吳錦堂捐助二百元 吳錦堂捐助一百元 吳錦堂捐助五十元 吳錦堂捐助二十元 吳錦堂捐助十元 吳錦堂捐助五元 吳錦堂捐助二元五角 吳錦堂捐助一元二角五分 吳錦堂捐助六角 吳錦堂捐助三角 吳錦堂捐助一角五分 吳錦堂捐助七分五厘 吳錦堂捐助四分 吳錦堂捐助二分 吳錦堂捐助一分	計洋七百元

書全湖二白杜刻續 (〇三)

業已聲明伏乞	還現尙未收合併聲明謹稟
大公祖大人俯賜鑒核 迅予	宣統二年二月 日呈
奏咨定案俾垂永久而資利賴實爲公便再	計附呈 捐款清册一扣 杜白兩湖二
職商除捐助銀七萬四百七十六元一角	千分之一詳圖各五分 畝分清單一紙
六分九釐外另於宣統元年三月間由水利	善後章程草議一册
局現充管事之沈衍周手借墊濬掘杜湖塘	謹將捐資籌辦慈北水利事宜各欸開
基運河費二千元訂明由湖田租息項下提	列於左
一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一	計洋貳萬貳千貳百元
一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一	共計洋壹萬壹千壹百參拾四元四角
一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一	計洋陸千玖百八拾壹元壹角
一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一	計洋貳千五百三十元
一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一	計洋捌百五十元
一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一	計洋捌百五十元
一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一	三共洋陸千零四拾玖元四角七分
一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一	計洋壹千玖百拾元
一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一	計洋參百九十五元
一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一	計洋貳千九百六十五元
一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一 一 築石壩壩壩一	計洋捌百五十元

主だった工事名とその費用が列挙されています

「水利局經理沈衍周の不正事件」概略

『通信』第20号に、曹愛徳著『大人物小故事 我的外公呉錦堂』から「善悪」を掲載しました。これは、呉錦堂が錦堂学校の宿舎で就寝中、暗殺者に襲われるが、拳法の得意な用務員の飛びけりに救われるという話です。暗殺者を雇った人物、沈増輝の名も出てきます。スリリングな話ではありますが、事件の大きさ、背景の深さには思い至りませんでした。この話は、下記、引用2の前半部分に該当します。

今回、森田明著『清代の水利と地域社会』「第九章 呉錦堂と杜湖・白洋湖の水利事業」と『続刻杜白両湖全書』を読み、ことの重大さを理解しました。呉錦堂の水利事業に関係する出来事というだけでなく、清末の慈谿という地域社会における大事件だったのです。
(編集委員 橘雄三)

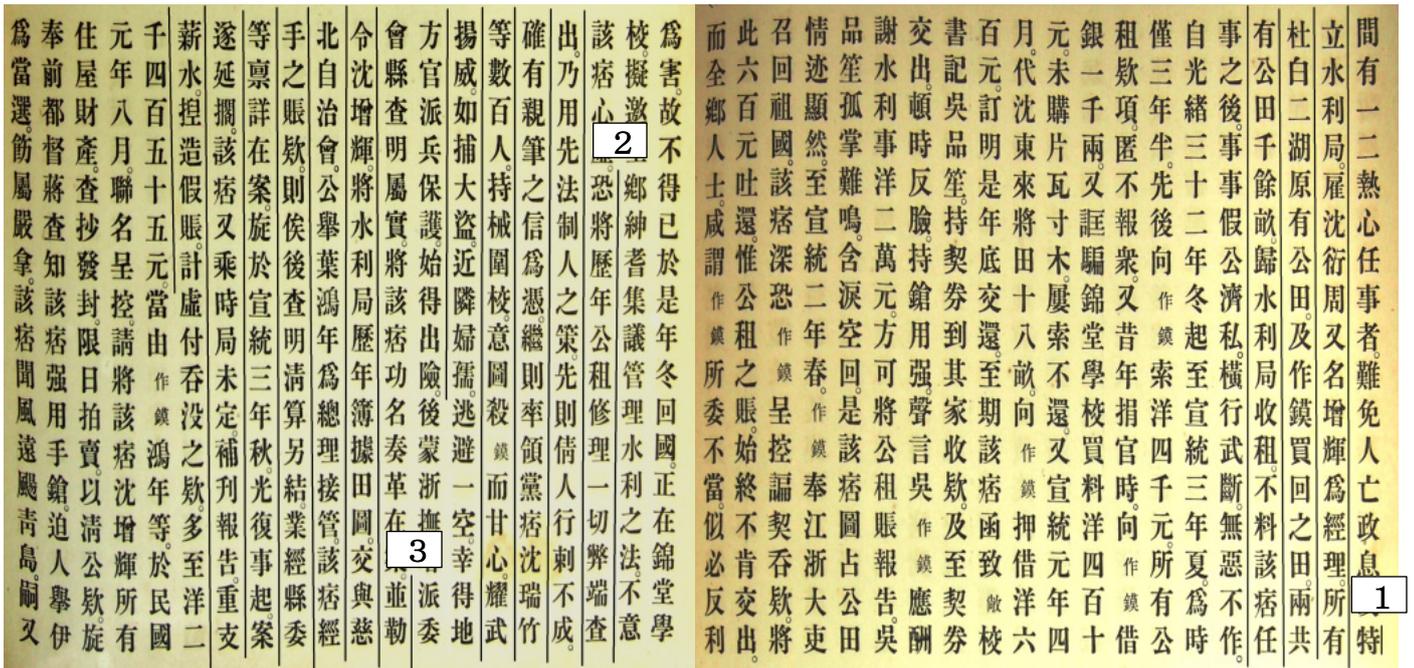
「水利局經理沈衍周の不正事件」について、森田明著『清代の水利と地域社会』「第九章 呉錦堂と杜湖・白洋湖の水利事業」の「三 杜白両湖の水利事業」から引用するとともに、典拠となった『続刻杜白両湖全書』の該当箇所を転載いたします。

引用1 ■ ところで、呉錦堂の義捐による水利事業の開始とともに、「特立水利局、雇沈衍周、又名増輝、為經理」と、新設の水利局では、沈衍周（増輝）を經理として雇用し、その管理を委任したのである。彼は光緒三十三年から宣統三年まで水利局經理の任にあったが、その間、「不料該痞任事之後、事事假公濟私、構行武斷、無惡不作」と、職権をかりて業務上の横領を行い私利を追求して、「叢弊甚夥」という不正事件を惹起した。（中略）

引用2 ■ 不正が、呉錦堂らの監査によって発覚

するのを恐れ、機先を制して人を雇い、彼を刺殺せんとしたが未遂に終わった。この事件が沈の企図に依ることは、彼の直筆の依頼状によって明白であった。続いて宣統二年十一月二十二日には、沈瑞竹ら数百人の党痞が、武器を持って錦堂学校を包囲し、呉の殺害をはかったが、幸い地方官の派兵要請によって党衆は解散し錦堂は危機から脱出することができたのである。

引用3 ■ その後、沈衍周の罷免と同時に、地方官による厳重な管束が奏請される一方、水利局の関係帳簿類を押収して慈谿北自治会に移交し、新たに葉鴻年を公挙して総理として水利局の管理を接管せしめた。葉鴻年を中心として、沈の経手下の賑款（会計帳簿）の査明が行われた結果、薪水の重支（二重取り）や仮賑（にせ帳簿）の捏造等により、総計二千四百五十五元



上掲原文画像は『続刻杜白両湖全書』の本文112頁上段及び下段です。画像中の1、2、3及び傍線は編集委員の加筆です。1、2、3は、それぞれ、上の枠内、引用1 ■、引用2 ■、引用3 ■に対応します。

呉錦堂 故郷慈谿での水利事業中の写真一葉

『続刻杜白両湖全書』冒頭のこの頁は特によく目にします。写真には、「宣統元年五月十五日、杜湖東門水門の傍ら、緊急の減水堤防修築工事を監督する呉錦堂氏」との説明がついています。傘を差し、波立つ水中に立つ呉錦堂の表情には決意が感じられます。日本語訳は編集委員が担当しました。叱正願います。



明治42年、私は貴国呉錦堂氏の招きを受け、氏の故郷、浙江省慈谿県北郷にある杜白二湖の測量を行いました。両湖は山に依り野に沿って数十里続いています。測量は四か月以上かけて完了しました。私が、支度を整え、まさに帰国しようとしたとき、大雨に見舞われ、出発できなくなりました。呉氏は杜湖の塘閘（つつみと水門）を築造し、また、杜湖の東門閘脇の減水堤防工事が始まったばかりの時期で、連日の大雨で、山からの水は水位を急上昇させ、湖の内外は大海のようになり、風は強く、波は高く、堤防は今にも決壊しそうになっていました。

呉氏は裸足で、大雨の中、自ら工事を監督し、昼夜、建設を急ぎ、やっとなし、と保全ができました。呉氏の功績は偉大です。私はかねがね思っており、呉氏は中国の内外に名を知られた豪商で、故郷で公益を図り、わが身と財産を惜しまず、自ら危険な地を踏み、疲れを顧みません。近年、世の中、このような人はめったにいません。

私は、ちようどまた、堤防のところで、憔悴、蕭然とした表情の呉氏に会いました。私は心を打たれ、この写真を撮りました。ここに、記念として敬慕の気持ちを留めます。

白洋湖と杜湖の裏湖四湖は、高山が全湖をぐるりと抱え、天然の水源となつて、いつの世にも恵みをもたらす、「二天」と言われて尊重されてきました。その杜湖南山北堤防は、形勢がすこぶる広く、十里の長堤防を一望すると海の様です。両湖の

面積は八千余畝で、たとえ大雨水に遇っても心配することはありません。湖は大雨水を受け入れることができ、湖は田より一丈余高く、田は海より五丈余高く、過剰な水は浦から排出され海に帰り、干ばつときも、大雨のときも心配ありません。ただ、貴郷の賢人達士が永く湖浦の水利を保全し、呉氏の苦心を無にすることがないように願います。隣国の一測量師として、この水利施設に大きな期待を寄せ序文とします。

大清宣統紀元五月 日
大日本明治四十二年六月 日
日本鐵道工程局測量師工學士 島 總 彦

面積八千餘畝雖遇大雨水不為病以湖能受之也湖高田丈餘田高海五丈餘水多則浦洩歸海早潦無虞惟慮貴鄉賢人達士永保湖浦水利毋負 吳君之苦心此則鄰邦下士實所厚望也是為序
大清宣統紀元五月 日
大日本明治四十二年六月 日
日本鐵道工程局測量師工學士 島 總 彦

宣統元年五月十五日
吳君錦堂在杜湖東門閘傍監督築減水壩之肖像

明治四十二年予受 貴國吳君錦堂之聘為其故里浙江慈谿縣北郷測量杜白二湖事該二湖依山傍野綿亘數十里越四閱月測始告竣予正擬整裝歸國適大雨滂沱不克成行而 吳君興修杜湖塘閘又創築杜湖東門閘傍之減水壩工程初興而大雨連朝山水暴漲湖內湖外盡成汪洋風勁浪高幾至沖決 吳君赤足冒雨親自監工日夜甦築始獲保全 吳君之功偉矣竊 吳君以中外望重之豪商而為故鄉國公益乃不惜身家躬履險地周顧勞瘁求之晚近誠世所罕傳時才適亦在塘次見 吳君形容憔悴蕭然有感特撮此照以作紀念而誌欽仰惟白洋湖與杜湖之裏湖四面高山廻抱全湖天然水源利垂萬世故號曰二天其杜湖南山北塘形勢頗廣十里長隄一望如海兩湖